ベトナムにおける日本文化

ホー・ホアン・ホア (Ho Hoang Hoa)
東北アジア研究院 日本研究センター

グローバル化の進んだ今日の国際社会では、人、物、金などの流通が瞬時になされる。また、インターネットなどを通じて世界中の情報がすばやく入手できるようになっただけでなく、ビジネスも行われるようになっている。更に、世界中の国々との貿易が可能になったほか、自国にいながらにして他国の音楽やドラマなどを鑑賞できるなど、私たちはグローバル化の恩恵を日常生活の各所で享受している。そして政治、経済、社会、文化などあらゆる分野に亘って国家、企業、個人など、様々なレベルでの交流が活発に行われ、国境を越えた相互信頼関係が高まっている。

この様なグローバル化という趨勢の中において、世界各国、特にアジア圏の国々との平和と相互理解を目的とした交流は不可欠である。長きに亘る戦争により、ベトナムは他の国々と比べて様々な面で遅れている。その遅れを取り戻すため、各先進国と交流、また協力しあうことはベトナムにとって極めて重要である。

日本とベトナムこの２つの国の間には文化面で多くの共通点があると言われている。その昔、両国間に正式な外交関係がなかった時代にも、交易があった。また、ファン・ボイ・チャウに代表される様なベトナムの愛国者達にとっては、明治維新の頃の日本は、ベトナム発展のために学ぶことの多い一つのモデルでもあった。

今日、国際化が進む中において、日本とベトナムは各分野で良い成果を収めており、日越関係は進展していると言える。

ここでは、両国間の外交関係締結時（1973年９月21日）から現在に至るまでの、ベトナムにおける日本文化の活動事情とその影響（文学、映画、音楽、漫画などの娯楽文化から日本語教育事情まで）について述べようと思う。

先に述べたように、過去において日越間には幾つかの分野において交流があったが、両国の政治事情が異なったため、長期間に亘り交流が寸断された。また近年に至るまで、わが国ベトナムは北部と南部に分断され、更に北部と南部で政治制度が異なったため、日本と外交関係があったのは南ベトナムのみで、一方の北ベトナムは社会主義諸国とのみ外交関係を持ち、日本を含む資本主義諸国との交流にはまだまだ制限があった。これらの理由が重なり、ベトナムと日本は、距離的にはそれほど遠くないにも拘わらず、これまで多くのベトナム人が「日本は遠い国」というイメージを持ち続けてきた。

ベトナム戦争（反米戦争）終結後、両国は正式に外交関係を結んだが、1980年代半ば頃までは経済以外の分野、つまり文化交流は進まなかった。しかし、1980年後半から二国間の経済関係、および政治、文化など他の面で新たな展開をみせる。日本側が、以前に比べてベトナムに対して友好的になり、またベトナムにおいて自国の文化を積極的に紹介し始めたのである。その結果、日本の政治家、ジャーナリスト、学者、文化活動家などが次々とベトナムを訪問するようになった。

それまでのベトナム人は、日本といえば、車の「トヨタ」「日産」、バイクの「ホンダ」「スズキ」、冷蔵庫の「日立」「ナショナル」「サンヨー」、オーディオ製品の「ソニー」、時計の「セイコー」などといった日本の高度成長の成果である消費製品しか知らなかったが、徐々に生け花、茶道、歌舞伎、能、文楽、などの日本文化を知るべ

トナム人が増えていった。

元々は詩歌や小説を好む民族であるから、日越の文化交流の先駆けとなったのは文学である。当初からベトナムでは様々な種類の日本文学が紹介された。ベトナムで最も数多く紹介されたのは散文と日本近代文学の短編小説である。わが国が戦争中の1960～1970年代、一部のベトナム人は俳句、短歌などの詩歌に加えて、川端康成の『千羽鶴』『雪国』、三島由紀夫の『金閣寺』、芥川龍之介の「忘れっぽい人」、TERO TABAKURAの“水源の道”や“静かな山々”など有名な日本の近代文学作品を知ることとなる。1980年代からは文学作品以外に、日本の歴史、文化、社会をテーマとした書籍が以前よりも多く翻訳され始める。代表的な作品としては、『タテ社会の人間関係』（中根千枝）、『日本社会の構造』（福武直）、『「縮み」志向の日本人』（RI OYOONG）、George Sansomの“日本文化史”、そして外国人諸作家による“DISCOVER JAPAN”（Words, Customs and Concepts）が挙げられる。更に、現代文学作品、主に短編小説、例えば“影がないランプ”（D.Watanabe）、吉本ばななの『キッチン』、また川端康成、井上靖、江戸川乱歩、松本清張、安部公房、永井龍男など有名な文学者達の作品を集めた『現代日本短編小説全集』など、数多く出版された。文学作品を通じて、日本の文学者達は、現代社会の中で生活している人々の実情とその社会で起こる様々な矛盾を反映してきた。一つ残念なことは、ほとんどの作品が日本語からベトナム語へ直接翻訳されず、まずロシア語、英語あるいはフランス語に翻訳されてからベトナム語に翻訳されることである。そのため、話の筋が十分に伝えられないこともある。

漢字を使用しないベトナム人にとって、日本語は難しい言語だと言われるが、これは日本文学の研究や紹介をする上で大きな障害となっている。日本文学は、他国、例えば韓国あるいは他の東南アジアの文学よりも早くからベトナムに伝えられて、数量も多かった。しかし元々、中国の古典文学や、西洋の文学に慣れているベトナム人にとって、日本文学は依然として理解し難いもの、奇異なものと思われてきた。日本文学はベトナムにおいて過去にも、また現在も度々紹介されているにも拘わらず、中国、ロシア、あるいはフランスなどの文学ほど人々に受け入れられていない。町の書店を観察してみても、翻訳作品のコーナーには中国文学や西洋文学が圧倒的に多く、日本の文学作品はあまり見られないのが現状である。

文学に比べて日本映画がベトナムに伝えられた時期は遅く、まだ特に大きな成果をあげていない。ベトナムでは、過去に都市部の映画館では何本かの古い日本映画を上映したことがあるが、ベトナムには日本映画に関する情報が殆どなかったため人々に関心を持たれなかった。しかし、1990年代の半ば頃から“おしん”という日本のテレビドラマが放送され始めると、今まで日本映画に興味の無かったベトナム人の間で日本への関心が一気に高まる。ドラマ“おしん”の視聴率は非常に高く、このドラマが放送されている時間帯は町の人影がまばらとなるほどであった。“おしん”という主人公を通じて描かれる伝統的な日本の女性像に対して、一般のベトナム人、特にベトナムの女性達は深く共感を覚え、そして時に彼女達は“おしん”に自分の姿を重ねて見ていたのである。

また“おしん”というドラマを通してベトナム人は過去の日本社会における女性の地位、更には日本女性が常に向上心や強い意志を持って生きているということを知ることとなる。

現在、ベトナムにおいて“おしん”という言葉は、ベトナムの都市部においては「貧しい女性＝お手伝い（メイド）」の意味で用いられることが多い。

“おしん”以外にも、「ホテル」「あすか」「女は度胸」「あぐり」「スチュワー

デス物語」など、日本人の責任感の強さや、仕事に対して勤勉で忍耐力をもって臨む姿勢、また生活や仕事の中のどんな困難にも負けず前向きに生きようとする姿を描いたドラマが放送された。それらの殆どは、今から約10年前の作品であったが、作品の随所に日本人の性質や行動様式を反映しているとして、一部のベトナム人視聴者から注目された。

数十年前、ハノイの映画館で黒澤明監督の「七人の侍」など若干の日本現代映画が上映されたが、相対的にベトナム人を引き付けることはできなかった。その理由としては、ベトナムで紹介された日本映画では、いつも主人公が不幸な身の上で、最終的には悪の勢力の前に屈するという同じようなテーマばかりで多様性が見られなかったこと、そして上映された映画に明るい場面が少なかったことが挙げられる。戦争のため、長い間、苦労に耐えてきたベトナム人にとっては、明るい人生や個人の生活を勝ち取るために悪の勢力と闘う作品以外、興味がないのである。現在ベトナムでは、韓国や中国のドラマや映画が頻繁に放送されているが、日本映画とは違い、多くのベトナム人に受け入れられている。しかし、その一方で、日本映画を通じて日本の歴史や社会背景、文化の特徴または日本人の性質について理解できるとも言われている。つまり、日本映画がまだベトナムで受け入れられないという状況は、今までベトナムで上映されてきた作品が日本映画のほんの一部に過ぎず、まだまだ日本の優れた映画が紹介されていないことに起因しているように思われる。

日本の現代社会には、いつも緊張感が漂っている。そして、この状態を解消するため、日本人は様々な娯楽を生み出してきた。その中の一つが「漫画」である。日本は、漫画とアニメの王国だと言われているが、それを象徴するかのように日本の書店には、子供のための漫画のみならず、大人のための漫画も数多く並べられている。今のベトナムでは、まだ大人のための漫画が殆ど普及していないため、ここでは子供の漫画についてのみ述べることとする。

ご存知のように日本の漫画には色々なテーマがあるが、やはり日常生活に関するテーマが一番多い。また、殆どの作品は娯楽を目的に作られているが、中には教育的な意味合いを持つものも存在する。こうした日本の漫画の多くは、中国や韓国、タイなどへベトナムよりも先に伝えられたが、ベトナムにおいて、子供達により強く影響を与えている。日本の漫画の魅力は、優れたデザイン性のみならず、分かりやすい内容と短く簡単な対話表現にある。1990年代初頭から、ベトナムの大手出版社キムドン社が、ベトナムの子供達のために日本で人気のある漫画を積極的に紹介し始めた。その先駆けとなったのが『ドラえもん』という作品である。そしてこの『ドラえもん』がベトナムの子供達の間で漫画本を読むブームの火付け役になった。現在、都市部に住む子供達の本棚には、漫画本が少なくとも１冊は置いてあると言っても過言ではないだろう。そして『ドラえもん』の登場人物、例えば「のび太」「ジャイアン（ベトナムでは“チャイエン”）「スネ夫（ベトナムでは“セイコ”）」などの名前は、ベトナムの子供達の間では、まるで自分達の友達の様に親しまれている。『ドラえもん』以外にも、『ちびまる子ちゃん』『ドラゴンボール』『セーラムーン』『未来少年コナン』『銀河鉄道９９９』『ポケモン』など、今、ベトナムでは次々に日本のアニメが紹介されている。

漫画は、普及し始めて以降、今まで文字ばかりで書かれた書物を読む読書文化しか知らなかったベトナム人の子供達から熱烈に歓迎された。日本の漫画はベトナムの子供の読書文化の嗜好を変化させたと言える。ベトナムや他のアジアの国々の子供達が日本の漫画を好む理由は、美しいデザインに加えて、各作品の中で描かれる登場人物（特に

子供）の普段の生活や物の考え方、行動パターンなどが、自分達と似ており、まるで作品の中に自分、或いは友人の姿を見ているかのように身近なものとして感じられるということにある。また漫画を通して、ベトナムや他のアジアの国々の子供達は、一般の日本人の暮らし向きや生活習慣、特に日本の子供の日常生活について理解を深めたのである。明るい内容の日本の漫画は、娯楽手段としてだけでなく、高い教育性をも秘めていると言えよう。現在、ベトナムのキムドン社ではベトナムの子供達のために、小学館という日本の出版社と提携して日本の若者世代が好む質の良い漫画を追求して出版している。残念なことに、日本漫画がベトナムの市場において圧倒的に紹介されている間に、アニメはベトナムの子供にまだ届いていなかった。現在ベトナムにおいて上映されているアニメは、中国やタイから伝えられている。

ベトナムでは、漫画以外にも日本の子供達の伝統的な遊びである紙芝居や折り紙などが、個人的或いは日本の団体によって紹介されてきた。特に紙芝居については、日本の出版社である童心社が何人かの絵本作家達と協力して、ベトナムの絵本作家や保育士のために、絵の描き方や紙芝居の演じ方などを紹介する“紙芝居ワークショップ”を開催し、大きな成果を得た。このワークショップ以降、ベトナムでは多くの優れた絵本が作られるようになり、一部の作品は日本で賞を受賞した。紙芝居は、幼児を対象とした新しい教育の形であるとしてベトナムで非常に歓迎され、また幼稚園での紙芝居公演を通して、日本とベトナムの絵本作家達の間には親交の輪が生まれた。紙芝居が漫画ほど広く普及するとは思えない。しかし、これは日本とベトナム両国間の友好と平和の思いを象徴する、一つの文化交流だと考えている。

この他の日本の伝統文化としては、例えば生け花、茶道、能、歌舞伎、文楽などが挙げられる。在ベトナム日本大使館では、文化交流活動の一環として、定期的に日本からこれらの文化芸能に携わる一団を招待して、日本の伝統文化を紹介する場を設けてきた。しかし、残念ながら日本の現代アートや音楽、舞踊などが紹介されることは殆どない。そのため、第二次世界大戦中のベトナムで「日本の音楽と言えば“シナの夜”」と思われていた様に、今のベトナムでは、「日本の現代音楽といえば五輪真弓の“恋人よ”」だと理解していると言っても過言ではない。GLAY、GOSPELLERS、BEGIN、宇多田ヒカル、KIRORO、GACKT、浜崎あゆみといった日本の若者に非常に人気あるポップス歌手や日本の映画スターについて、今なおベトナムの若者達は殆ど知らない。ベトナムには、日本の現代音楽に関する情報が殆どないからである。そして文学と同様、やはり、香港や台湾、韓国の映画スターはベトナムの若者に人気があり、また同じく西洋の有名なミュージシャンも広く受け入れられている。

日本の庶民文化の一つとして注目すべきは「カラオケ」であろう。この娯楽形態は1990年代半ば頃からベトナムで普及し始め、一時はカラオケブームを巻き起こした。カラオケは、あらゆる年齢層に受け入れられ、都市部から山岳地帯などの僻地に至るまで、次々とカラオケ店が出来たのである。日本人にとって、カラオケは仕事などで溜まったストレスや疲れを解消するための娯楽であり、多くの場合は会社の同僚や友人、家族と一緒に行くのであるが、中には一人で行く人もいる。何れにせよ、日本においてカラオケは明るくて健全な一つの文化の形なのである。ところが、ベトナムにおけるカラオケは、次第に形を変えて、今では一部のカラオケ店経営者にとっての不正収入の手段となっている。日本におけるパチンコが暇を持てあます人にとって時間を潰す一つの手段だとするなら、ベトナムではカラオケが一部無宿人にとって１日中楽しめる娯楽手段になっている。

勿論、カラオケが普及し始めた当初は、新しくて珍しい文化生活の形式として人々に人気があった。だが今では、「カラオケ」と聞けば多くの人々が悪いイメージを持つほど変容してしまった。現在、ベトナムでは、一部のカラオケ店が不良や犯罪者の溜まり場となっているため、最近では除々に排除され始めている。

日越間の一般的な文化交流において、最も効果を上げているのが日本語教育である。現在、ベトナムにはハノイ外国語大学、貿易大学、国家大学、フオンドン大学など正式な日本語教育プログラムを持つ大学がある。また一方で、日本政府あるいは財団の支援により日本語センターが数多く設立されており、ベトナムの若者にかなりの人気を博している。日本語を勉強する目的は多様であるが、一般的には日本企業に就職したいという理由が一番多い。

今、ベトナムでは日本語学習が普及し始めている。2002年後期までの国際交流基金の調査結果によると、ハノイ市では日本語教育26機関の内６大学で3000人の学生が、またホーチミン市では26機関の内６大学で7000人の学生が日本語を学んでいる。更に他の都市、例えばハイフォン、ダナン、フエなどでも日本語教育プログラムを持つ機関が増えてきており、現在では2002年当時に比べて数値はほぼ２倍になっている。

日本語教育という分野に対して、日本政府は積極的に援助を行ってきた。国際交流基金や文部科学省は、優秀なベトナム人学生に奨学金を与え、日本の大学を通じて日本へ留学させている。その他、国際協力機関であるJICAは、ベトナムの大学や日本語センターに優秀な日本語教師を派遣している。現在では、幾つかの中学校でも日本語教育プログラムを実施している。日本語の教育、学習、また日本について研究する場にベトナム人が積極的に参加し、両国間の友好関係を深めるために大きな役割を果たしている。両国が互いに理解し合い、経済発展のために平和的な友好関係を築くことは、グローバル化を進める上での一つ目標であると言えよう。

過去において、ベトナムでは日本文化について十分に紹介されてこなかった。そして今でもベトナムにおける日本の文化活動は、経済活動に比べてまだまだ少ないのが現状である。そのためベトナム人の日本文化や日本人に対する理解が進まないと言われている。これまでベトナムでは日本についてごく一部の伝統文化に関する情報しか紹介されてこなかった。つまり現代の日本の生活状況や大衆文化についての情報が殆ど伝えられない一方で、生け花や茶道、書道、能などといった日本の伝統文化だけが強調され続けたのである。そしてその結果、ベトナム人は日本の一つの側面しか見ることが出来なかったのである。

以前、ある学者が「日本文化は一方通行文化だ」と言ったことがある。つまり日本文化は常に受身の姿勢で、自国の文化を外に向けて発信しないという意味である。日本は国際化、グローバル化に向けて積極的に努力はしているが、過去の日本を振り返ってみると、この学者の見解は正しいと言えよう。

多くのベトナム人は、日本についてといえば、めざましい経済発展についての知識はあるものの、「桜の国　日本」という特色のある日本文化全体についてはまだ殆ど知らない。しかし、私達ベトナム人は、日本の文化を通じて、日本の社会、歴史、風俗そして日本人の考え方やライフスタイルなどを理解したいと思っている。そして、そういった理解がなされて初めてベトナム人にとっての日本が近い国、そして更にもっと近い国だと感じられるようになるのだと思う。

国際化の趨勢の中において、私が、これからの日本に期待することは、今まで日本が推進してきた経済面以外に、自国の文化をもっと多く海外に紹介して欲しいということ

である。日本は、独自の民族的な特色を色濃く残した文化を継承し、そしてその精華を効果的に今に伝えている。同時に、伝統的な部分と現代的な部分という２つの要素を絶妙なバランスで融合させることが日本文化の特色であるともいえよう。これこそ、国の現代化の発展過程において発展途上国が参考にすべき一つのモデルである。経済交流ほど活発でないにしろ、これまでの文化交流は、両民族の間に今後も理解を深めていくためのしっかりした基礎が築かれたと言える。

ちなみに、過去30年間の日越間の文化交流に関する注目すべき幾つかのポイントをご紹介したい。まず、日本はベトナムにおいて日本語教育や日本研究の分野を積極的に応援してきたということである。例えば、日本語教師の派遣、教育施設、教科書やノートなどの備品の整備などといった日本教育に関する多くのプロジェクトを実行してきた。その他、毎年、文部省や他の民間団体と同様に、国際交流基金もまた、ベトナム人大学生や教師、研究者、文化活動家達が留学や研究のために日本へ渡るチャンスを設けてくれている。特に、日越青年交流を目的として、毎年各分野の優秀なベトナム人青年数百名を日本へ派遣している。その他、国際交流基金は社会科学院の日本研究センターの様な研究機関に対して日本研究のための書籍を送る一方で、日本の経済、文化、歴史といった各分野の日本人専門家、研究者、大学の教授などを毎年ベトナムへ派遣し、ベトナムの研究者達に講義を行ってきた。つまり日本政府は、民間人との交流、日本の産業施設の見学や伝統文化体験などを通じて、ベトナムにおいて日本に対する正しい理解がなされるよう日々努めてきたのである。

その他、日本文化を紹介する展示会、演奏会、空手試合、日本の子供達の遊び、日本語スピーチコンテストなどのイベントを度々行ってきた。今から２年前の2003年には、日本とベトナム国交締結30周年を迎え、両国間の友好関係が、これからもたゆまなく続くことを確認する良い節目となった。

グローバル化と共存は、今や世界のスローガンである。世界の一メンバーとして、日本は自国の役割を十分に果たすため、経済面だけでなく優れた文化の側面もより広く世界に発信することが不可欠になってきている。そして、そうした文化を発信すれば、「クールジャパン（かっこいい日本）」をベトナム人に見せることができるのではないだろうか。これまでに紹介されてきた能、歌舞伎、文楽、生け花、漫画、相撲などに加えて、これからは歴史的な日本の建築物や美術、そして現代アート、デザイン、音楽、アニメ、ファッションなど多彩な日本文化をもっと紹介していって欲しいと思う。

この21世紀は、世界とアジアの揺るぎ無い平和と発展を目指して、日本とベトナムの両国間で効果的な協力と相互信頼が更に深まることは必至であろう。